



Data

監督：ワヌリ・カヒウ

出演：サマンサ・ムガシア/シェイラ・ムニヴァ/ジミ・ガツ/ニニ・ワシェラ/デニス・ムショカ/パトリシア・アミラ/ネヴィル・ミサティ/ムトニ・ガテカ/ナイス・ギティンジ/チェリ・カルミ/ヴィリタス・ワエル/ヘレン・アウラ/ギタエ・ンジョグ

■ショートコメント■

◆本作はカンヌ国際映画祭史上初のケニア作品だが、ケニア国内では上映禁止とされたものの。その理由は、主人公たちが、ケニアでは違法とされている同性愛に落ちるからだ。そんな映画が日本でも公開！

若い女の子の同性愛映画の名作は、断然フランス映画の『アデル、ブルーは熱い色』（13年）（『シネマ 32』96頁）と、戴思杰（ダイ・シージェ）監督の『中国の植物学者の娘たち』（05年）（『シネマ 17』442頁）。また、韓国の鬼才キム・ギドク監督の『サマリア』（04年）は、同性愛ではなく、援助交際走る2人の女子高生を主人公にした素晴らしい映画だった（『シネマ 7』396頁）。しかし、ケニアのナイロビ発の同性愛映画の出来は？

◆本作のチラシでも予告編でも、あっと驚き目を奪われるのはジキ（シェイラ・ムニヴァ）の衣装。ピンクを基調としたカラフルでフェミニンな衣装は本作全編を通じて変わらないから、それに注目！それに対して、国会議員選挙で対立する陣営の娘であるケナ（サマンサ・ムガシア）は、ボーイフレンドのブラックスタ（ネヴィル・ミサティ）から、「将来は俺の嫁に！」と言われているものの、私にはあまり魅力的とは思えない。しかし、意外にもそんな2人が一目会ったその日から・・・。

◆日本は基本的に何に対しても優しく、寛大なお国柄だが、フランスはそうではなく、何事にも手厳しいお国柄。そのため、『CEO（最高経営責任者）』（02年）では、世界進出を狙う「ハイアール」がフランスを最初のターゲットにしたのは、「フランスが消費者の目が最も厳しいため」というストーリーが印象的だった（『シネマ 17』335頁）。すると、フランスは本作に対してどんな評価を？

しかし、フランスのPremière紙は、ケニアの同性愛映画という真新しさと、それに付随する上映を巡る問題で世間を賑わせ、さらにはアフリカ映画の「今」を反映するブルキナファソのワガドゥッグ全アフリカ映画祭でサマンサ・ムガシアが最優秀女優賞を受賞した

本作について、「良き信念で作られた映画が決して良い映画なのではない」とかなり辛辣な評価をしているようだ。本作を鑑賞した私の感想は全く同感だが、さて、あなたは・・・？

◆本作では『ロミオとジュリエット』風に、ケナの父親ジョン・ワウラ（ジミ・ガツ）とジキの父親ペーター・オケミ（デニス・ムシヨカ）を、対立する国会議員候補と設定することによってケナとジキの（同性）愛の成就をより難しくしているが、私の意見ではそんな設定は無用。それよりも、なぜケナとジキの2人が互いに惹かれあったのかをもっと説得力をもって描いてほしかった。また、2人に共通するキーワードは「something real」だが、これがきわめて抽象的だから、いやになる。つまり、私はその言葉が、日本の若者たちがお気軽に発する「自分探しの旅」と同じように空虚に聞こえてくるわけだ。現にケナは医者にならず（なれず）看護師になっていたし、ジキもロンドン留学(?)をしたものの、「something real」になれたとは思えない。したがって、本作の問題提起性は大いに評価するものの、『アデル、ブルーは熱い色』や『中国の植物学者の娘たち』の素晴らしい出来とはちょっと違うと言わざるを得ない。

2019（令和元）年12月13日記